



2019年
2月5日
No. 155

2019年度 東京蜘蛛談話会総会例会

1. 日時 2019年5月5日(日) 10時より(開場9時30分)
2. 場所 東京環境工科専門学校 〒120-0022 東京都墨田区江東橋 3-3-7
JR 総武線 東京メトロ半蔵門線 錦糸町駅南口から徒歩3分
3. 連絡 当日は、東京環境工科専門学校の電話が使用できないので、緊急時には以下に連絡ください。
加藤輝代子 090-7012-6458 初芝伸吾 090-6156-8378
4. その他 プロジェクター, OHP 等用意いたします。
5. 講演をご希望の方は、演題と使用希望機材
(スライド, OHP, コンピュータ)
を事務局初芝までお知らせください。

〒186-0002 東京都国立市東 3-10-8 コンフィデンス高垣 105
有限会社エコシス 初芝伸吾
mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.jp
Tel : 042-501-2651 Fax:042-501-2652

- 錦糸町駅南口から徒歩3分です。



東京蜘蛛談話会 2018 年度採集観察会

1. 期 日： 第 4 回 2019 年 2 月 10 日（日）
2. 場 所： 国立市のママ下湧水・多摩川河川敷
3. 集 合： 集合 10：00
南武線 矢川駅北口下のロータリー
4. 世話人： 初芝伸吾
携帯電話：090-6156-8378
甲野 涼
携帯電話：090-9370-4950

観察会の予定としては、午前ママ下湧水、昼食後移動して多摩川河川敷で行い、夕方、反省会にしたいと思います。

東京蜘蛛談話会 2019 年度採集観察会

1. 期 日： 第 1 回 2019 年 5 月 19 日（日） 第 2 回 2019 年 7 月 7 日（日）
第 3 回 2019 年 10 月 20 日（日） 第 4 回 2020 年 2 月 16 日（日）
第 3 回，第 4 回は仮の日程です。通信次号で確定した日程をお知らせいたします。
2. 場 所： 天覧山
3. 集 合： 集合 10：00
西武池袋線飯能駅改札
徒歩で天覧山まで移動
遅れた方は、バスもありますので、後日案内します。
(ただし 1 時間に 2 本)
4. 世話人： 平松毅久・嶋田順一

東京蜘蛛談話会 2019 年度合宿

2019 年度の合宿は、日本蜘蛛学会大会に続けて山形県鶴岡市を拠点として行います。詳細は通信次号でご案内いたします。

東京蜘蛛談話会例会

2018年12月2日 東京環境工科専門学校にて



参加者一同

(1) クモの生活と紫外線一求愛・餌の誘因・捕食者からの逃避

浅間 茂



(2) イギリスとイタリアで見かけたクモ

須黒達巳



(3) クモ標本について

輿石紗葉子



(4) 東南アジア産ゴミグモ属の1未記載種

谷川明男・ポッパペチャラッド



通信原稿投稿先：谷川明男 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416

E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

通信の原稿締め切りは、4月末まで、8月末、12月末です。

(5) タイ王国クモ見
遊山の旅 2018

谷川明男



(6) クモ食性”クモ
類における成長に伴
うクモ食率変化

鈴木佑弥



(7) キノボリトタテ
は飛ぶのか？ 伊豆
諸島の分布から

笹岡文雄



(8) スズミグモの網
構造の再検討

新海 明



(9) 清澄山における
ジョロウグモの個体
数の45年間(1974
年~2018年)の変化
新海 明



(10) クモの話題3
つ：①アジアクモ学会
議，②ハラフシグモ，
③ミズグモはハグモ
か 小野展嗣



(11) 何処に住みたい
のかよく分からない
子守り蜘蛛

荘司康治郎



入退会は：事務局 初芝伸吾 〒186-0002 東京都国立市東 3-10-8
コンフィデンス高垣 105 有限会社エコシス

E-mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

東京蜘蛛談話会の会費は、一般 2000 円、学生 1000 円です。

会費は郵便振替口座 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会へお願いします。

会費のことは：会計担当 須黒達巳

〒150-0013 渋谷区恵比寿 2-35-1 慶應義塾幼稚舎

TEL : 080-5683-2765 E-mail: t.s.schlegelii@gmail.com

※談話会の会費は前納制となっております。本号に請求書と振込用紙を同封
いたしましたので来年度分までの会費の納入をお願いいたします

クモが出てくる子どもの本情報 (16)

2016年に出版された児童書と2018年に出版された 雑誌各1点の紹介

萩野 康 則

今回は、2016年に出版された児童書1点と、昨年12月に発行された雑誌1点を紹介させていただきます。



新開 孝 (写真・文) よみきかせ いきものしゃしんえほん 24「うまれたよ! クモ」 28.5×24.5cm/33pp. 岩崎書店 2016年4月発行 ISBN978-4-265-02064-5 税込2,310円

2011年に「よみきかせ いきものしゃしんえほん」シリーズという写真絵本が刊行開始され、これまでに3期に分けて10冊ずつ、合計30冊が既刊となっている。タイトルは全冊「うまれたよ!○○」で統一されており、○○

のなかにモンシロチョウ、オタマジャクシ、メダカ、ザリガニ、カナヘビ、ボウフラなどの動物名が入る。いずれも卵から、脱皮・変態を通して親になるまでを、鮮明な写真と簡潔なテキストで示している。テキストは仮名と数字のみで、数字にもルビを振る徹底ぶりである。32-33ページには、各動物の生物学を簡単に解説するコーナーを配している。

シリーズ名に「よみきかせ」とうただけあって、子どもに読み聞かせをしやすいように作られている。判型は大きく、見開き47×28cmの大画面を一杯に使った写真は迫力がある。テキストがゴシック体で読みやすいのは、読んで聞かせる大人にも有り難い。表紙は堅強であり、すぐにボロボロになってしまうカバーが付いていないのが利いている。

本書は同シリーズの 24 冊目にあたり、新開孝さんの手によるクモの単行本としては本紙 136 号で紹介させていただいた「クモのいと」（ふしぎいっぱい写真絵本 16、ポプラ社、2009 年）に続く 2 冊目である。

取り上げているクモはコガネグモである。世間一般の方々がクモと聞いてまず思い浮かべるのは、やはり垂直円網を張る大型のクモで、しかも人家周辺で普通に見かける種だろう。オニグモあたりが最有力候補だろうか。しかしオニグモは色彩的に地味で、一種の生活を追いかける絵本の題材にはなりにくい。となると人家周辺では減っているとは言え、派手なコガネグモがもっともふさわしい種類、ということになるのかもしれない。

雨上がりか朝露か、コガネグモ幼体の網に水滴が光っている表紙をめくると、見返しには初夏の草原で枯れ枝に付いている卵のうが現れる。以後、黄色くてつやつやした卵塊、発生が進んで子グモの体が透けて見える卵塊、ふ化、出のう、まどい、分散までを、14 ページもかけて示している。ふ化したての未だ着色していない子グモのかわいらしいこと！ 人間に例えれば「まだ目も開かない赤ん坊」のようで、個人的にはこの写真が本書のベストショットである。その後子グモが網を張る様子、冬の間も網を張って獲物を待っている姿、春になり多くの獲物を食べてどんどん大きくなること、そして脱皮して成体になり卵を産むまでを、淡々と紹介している。そして最後は、草原の草の葉に産みつけられた卵のうを写してストーリーの始めに戻る、という内容である。オーソドックスな構成で、あまり新鮮味は無いかも知れないが、その分安心して子どもに読ませられ、読み聞かせられる本に仕上がっていると感じた。

これまでに出版されているコガネグモ一種を中心に扱った児童書単行本は「クモ合戦」（花岡大学/著、文研出版、1978 年）や「こがねぐも」（甲斐信枝/作、福音館書店、1984 年 [オリジナルは月刊「かがくのとも」1982 年 9 月号]）、「やあ！ 出会えたね クモ」（今森光彦/文・写真、アリス館、2005 年）ぐらいであり、しかも写真絵本は最後の 1 冊のみである。思いの外少ないのだ。本書はそんなありそうであまり無い「コガネグモの写真絵本」の、貴重なニューフェイスと言えるだろう。

澤口 たまみ（文）・館野 鴻（絵）「なりすます むしたち」 かがくのとも 2018 年 12 月号 25×23cm/28pp. 福音館書店 雑誌コード 02377 税込 420 円

クリの木の幹でアブラムシの甘露を求めて列をなすアリ、アリ、アリ…。行列から離

なりすます むしたち

澤口 たまみ ぶん 創野 湧 え



れたところにいる1頭のアリが風に吹かれて落下したが、よく見ると糸にぶらさがっている。そう、アリではなくアリグモだったのだ。このアリグモを主人公に、擬態するクモや昆虫を、精緻な細密画で紹介した作品である。

アリグモが葉の上を歩いていると、葉の縁に1本のクモの糸が張られていたので、その上をたどっていった。突然、糸の真ん中に掛かっていた松葉が動きだし、アリグモに襲いかかった。松葉に見えたのはオナガグモだったので

である。すんでのところまで難を逃れたアリグモは徘徊を続け、やがてヨモギの茎のアリとアブラムシの群れに出会う。いくら姿を似せているといっても、アリグモにとってアリはこわい存在で、襲われたらひとたまりもない。アリグモはアリに見つからないように用心深く身を隠し、アリがいなくなったわずかな時間にアブラムシを1頭くわえて別の場所に行き、アリに襲われることもなく、アブラムシを食べることができたのである。

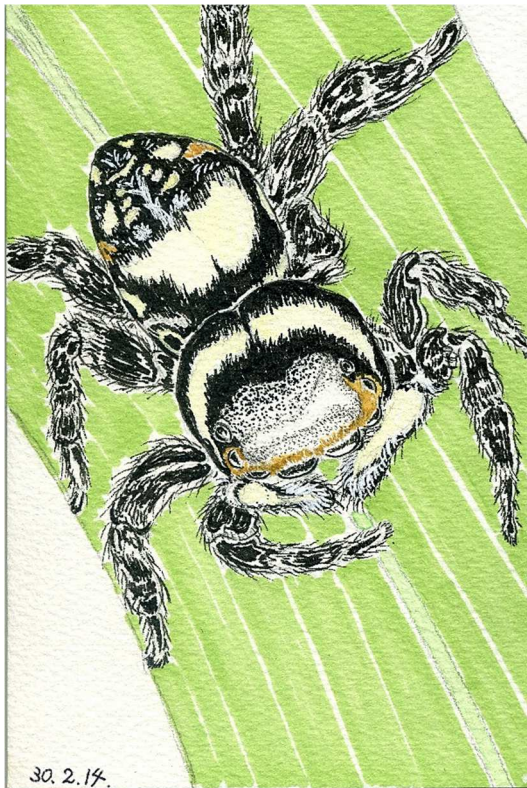
この間に、アリに似たホソヘリカメムシ、ジャコウアゲハに似たアゲハモドキ、ハチに似たハエ・アブ、ガ、カミキリが登場する。またクモとしては、アリグモとオナガグモの他に、緑色の体色で葉上にいると目立たないワカバグモ、アリを食べるアオオビハエトリ（前肢を上下に動かしてアリの動きを真似て、アリを油断させているのかもしれない）が取り上げられている。

科学絵本は、ある現象を「〇〇が××なのは、△△だからである」と断定的に説明しているものが多い。アリグモの例を代入すれば「アリグモがアリに似ているのは、恐ろしいアリに似ていることで他の敵に襲われにくくなるからである」となる。物理学など、因果関係が証明されている現象はそれでよい。ところが動物の行動など、理由がはっきりしていないことを、予断をもって同じ言い方で説明するのは危険である。その点、本書は「～からである」ではなく「～かもしれない」と、断定せずに含みを持たせた表現で一貫しており、大変好感が持てる。

文を書かれた澤口たまみさんは農学部で応用昆虫学を専攻された方で、博物館に展示

解説員として勤務した後に、大学院に戻られ博士課程まで進んでおられる。博物館勤務中の1985年ごろより、自然をテーマにした文章を書いたり、子どもたちを対象にした自然観察会を開くようになり、「虫のつぶやき聞こえたよ」（白水社、1989年）で日本エッセイストクラブ賞を受賞されている。また、福音館書店の児童雑誌の常連で、絵の館野さんとのコンビ作品には「こまゆばち」（かがくのとも2012年10月号）がある。

絵を描かれた館野鴻さんは「日本のフェアブル」こと熊田千佳慕さんに、幼少のころから師事されており、その卓越した細密描写は師を偲ばせるものがある。また、絵本を作成するために対象の虫を観察する必要があるが、そもそも生活史が良く分かっていないツチハンミョウを手がけた際は、野外観察のみならず飼育まで手がけ、絵本として完成するまで10年もの歳月を費やしたという。絵本作品に「しでむし」（2009年）、「ぎふちょう」（2013年）、「つちはんみょう」（2016年、以上3冊いずれも偕成社）など、挿し絵作品に「ねえだっこして」（竹下文子/文、金の星社、2004年）などがある。



「『世にも美しい瞳 ハエトリグモ』の本を見る前に描いたんですけど」とアダンソンハエトリグモの絵を持ってきてくれたコウさん。「家の中にいるとは知らず、葉っぱの上に描いてしまいました」と言います。さらに「前中眼が小さく、後中眼が大きくなってしまいました」と反省済み。前中眼とか後中眼という用語が出てくる時点で、私より断然、専門家っぽいじゃないか〜と尊敬の眼差しでコウさんを見てしまいました。次はどんなハエトリグモを描いてくるのかなあと勝手に期待してしまいます。コウさんは、蜘蛛愛好家が自分の絵をどう見るのか知りたいそうです。ご感想など、お知らせいただけると嬉しいです。

（中島亜紀）

アシダカグモ

加藤 康子

学生の頃、ヒマラヤスギに囲まれた古い家に住んでいた。一階はガラんとした部屋が物置のようになっていて、使われなくなった椅子などが寄せてあり、何故か卓球台が中央に置いてあった。私は二階の部屋を借りて一人で住んでいたが、食器などの日常生活用具は階下の物入れにしまっていた。

そこには、染みだらけの木の扉がついていて、開けるたびにギィーと鳴り、湿っぽい空気が扉のきしむ音とともに流れ出てくる。物入れの隣はトイレだった。ヒマラヤスギの枝が生い茂り、窓に深い色の影を落としている。壁にはよく一匹二匹のヤモリが張りついていて、水滴のような足先をかわいらしく広げてじっと動かずまるで壁に描いた絵になっている。夜になったら餌を求めて、きっとあちこち徘徊するのだろう。

あるとき、そのヤモリを壁からはがして、手のひらにのせてみた。すると、意外にもヤモリは慌てることもなく、私の手のぬくもりを感じてでもいるように大人しくしている。ヤモリを近くでまじまじと見たが、実に不思議な目をしている。眼球の中央を縦に菱形模様が連なって、何の役にたっているのかは知らないが、眼全体のゆらゆらとした透明感の中で風変わりな神秘的な模様になっていた。

隙間だらけの古い家には他にもいろいろな虫達が入ってきた。こおろぎ 鈴虫 バッタ カメ虫 百足など 夏の間は家の中のあちこちで虫の声が聞こえた。耳を澄

KISHIDAIA 原稿投稿先：

谷川明男 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416

E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

Yahoo box ID kishidaia PW spider にアップロードして、その旨を谷川までご連絡いただいても結構です

キシダイアの原稿締め切りは、6月末日と12月末日です。

まし、眼をこらしていれば、実に自然はめまぐるしく変化し たくさんの音や色彩で物語を生み出してくれる。

庭には ヒマラヤ杉と雑草しか無かったが、花々の咲く美しい庭がほしいと思ったことはなかった。素晴らしいことではあるけれど、そこには収集した花や木に愛情を注いで育てる ふさわしい園芸家が必要だろう。私はヤモリや虫達が 戸袋の隅や 柱の陰に こっそりと存在している古い建物の地味な暮らしが気に入っていた。

そんな日々の中 ある夜 温かいお茶が飲みたくなった私は 階下に降りて物入れの扉を開けた。ギィーときしむ音とともに 生暖かい空気がふわっと流れ出てきた。

すると 突然 上から 何か大きな黒い手のようなものが落ちてきた。思い切り指を広げた真っ黒な手が、私の頭と額をかすめて落下した。私をめがけて跳びかかってきたのだ。「ギァー」と叫んだつもりだったが 実際には声は出ていなかった。

一瞬のことで 何が何なんだかわけもわからず、思わず「ついに出たか 悪魔の手！」と口走っていた。そして 自分の発したその言葉にぞおとした。

数日前のことだったが、庭の雑草を刈っていたとき、裏の空地で見つけたものがある。草の中に 人の手によって刻られた長四角の石が見えた。石のベンチかなと思い近づいてみると何とそれは文字が彫られた一基の墓石だったのだ。横倒しになって風雨に晒され 苔も生えている。かなり古いものに思われた。

そもそも、どうして一基だけここに放置されているのかわからないが、取り残された忘れられた墓石があるとうことは、この空き地が、かつて墓地だったということだ。墓地があるのは別に悪いことではないが、放ったらかしの墓石が転がっているというのはつらいことだ。空地の地続きにはキリスト教会が建っていた。以前、草を刈っている人を見たことがある。

協会からは日曜日毎に オルガンの響きと人々の歌声が聞こえてきた。窓から眺めていると、柔和な表情を浮かべた人が 私に向かって挨拶をしてくれた。しかし 夜になってオルガンの練習をしているらしい讃美歌の旋律が聞こえてくると なんとはなしに物悲しくなって 感傷的な想像に落ち込むこともあった。

墓地跡に建つ協会と ヒマラヤ杉の下に埋もれているような古い家、ギィーと不気

味に鳴る扉と ミステリアスな条件がそろって、ついに夜更けに頭上に落下したのは、黒い悪魔の手というわけだ。ほんのわずかな時間 そんな妄想が頭を過ったが しかしすぐに我にかえって、現実になんかあるはずがないと気づいた。黒い物体は 額をかすめた感じがふわりとしていたし、薄暗くてよくわからなかったが 何か生きものの感触があった。

私は 玄関の明かりを点け 懐中電灯で物入れの隅々を照らした。そして、発見した。大きくて足の長いクモ、アシダカグモだった。当時は クモについての知識は無く、名前も知らないこの大きなクモが有害か無害かも判断できなかった。とにかく 何とか外へ追い払いたい気持ちばかりで 箒でやみくもに掃き出すことしか思いつかなかった。

その後も 何度か同じことが繰り返され、入れ替わり 立ち替わりアシダカグモはやってきた。それぞれ別の個体だとすると、あの物入れが特別にアシダカグモに好まれる場所だったのであろう。

ヤモリや虫達には愛着を感じていたのにどうしてクモが嫌だったのか、クモの網の美しさには魅了されていたのに クモそのものには 何故興味が無かったのか、考えてみると、やはり、“気がつかなかった”ということだろうか。

私が本当の意味でクモに出会えたのは ほんの数年前、ハエトリグモを虫眼鏡で見たときからだ。今では好きなクモも沢山いるが、アシダカグモを見ると、甲冑を身にまとった凛々しい騎士の姿を連想する。長くて逞しい足が闘いの構えをするときは 見飽きることのない美しさで圧倒される。

KISHIDAIA 発刊 50 周年記念号の原稿募集のお知らせ

2019年1月でKISHIDAIAが誕生してから、50年になります。そこで、114号と115号を「50周年記念号I・II」として出版することになりました。つきましては、記念原稿を募集しますので、たくさんのご投稿をお待ちします。談話会の活動についての思い出、要望などなんでも構いません。字数制限もありません。

115号の締め切りは2019年6月末日を予定しています。

問合せ先：新海 明・谷川明男



Yasuko. K